

主催 邦楽連合会

清元協会

港区南青山二の九の五
電話(四〇二)〇二四〇番

財団法人 古曲会

中央区銀座八の六の三新橋会館
電話(五七二)〇二二六番

常磐津協会

目黒区下目黒三の十八の十七
電話(七二三)五三七七番

長唄協会

中央区銀座八の十一の九
電話(五七二)四九四五番

社団法人 日本三曲協会

文京区白山五の二十六の十二
電話(九四一)二三七六番

(五十音順)

後援 東京都

昭和四十六年三月十五日(月)

国立小劇場

第一部 一時半開演 五時終演
第二部 五時半開演 九時終演

東京都文化助成公演

都民におくる

第一回 邦楽演奏会

第一回邦楽演奏会によせて

東京都知事 美濃部亮吉

東京に青空をとりもどしたいというのが、私のねがいである。みどりときれいな川と安心して歩ける道路を、私たちのものにしたいともねがう。

東京がくらしやすいまちになるためには、さらに文化の香りの高い都市であることが必要である。都民のみなさんに、すぐれた芸術を安い料金で鑑賞していただけるようにしたい、そう考えて、芸術文化団体の公演に東京都が助成することを始めてから、今年で三年目になる。

助成の対象になる公演も毎年ふえてきたが、私になによりうれしいのは、都民のみなさんがこの助成公演を本当に楽しんでくださっていることである。今年も、音楽、演劇、舞踊、古典芸能の各分野について公演が行なわれることになった。

ここに上演される邦楽演奏会は、とかく忘れられがちな日本の伝統音楽が、一堂に会して、都民の皆さんに楽しんでいただくことを目的としています。

都民のみなさん、どうぞごゆっくりご鑑賞ください。

御 挨拶 邦 楽 連 合 会

このたび、都の助成金を得て、ごらん通りの邦楽演奏会を開催いたすこととなりました。日本の伝統音楽のよさが、最近、見直されてきましたが、まだまだ一般の方に、十分わかっていただくところまでには至っておりません。

このように、邦楽が一緒に集まって、自主的な演奏会を開くというのは、長い間の私たちの念願でした。そして、今までに邦楽と縁のうすかった方たち、一般の方たちと話し合ってお互いに邦楽について考えたい、そんな夢を抱いておりました。そうすれば邦楽に従事している人たちの技術が向上するでしょう。そして一般の愛好者の方たちと一緒にやって、よい伝統を守って行きたいものだと考えておりました。

その夢が、やっと第一歩をふみ出したようです。どうぞ、御聞きになった御感想、御意見をお寄せ下さい。

第一回のために、種々と不行届の点があったと思いますが、その点はどうぞお許し願います。次回には、私たちの夢が実現に一步でも近づくよう、よりよい会にしたいと考えております。

どうぞ、ごゆっくり御鑑賞下さいますようお願い申し上げます。

第一部番組（一時半開演）

一、長明京鹿子娘道成寺（舞台面）

杵屋六澄衛	杵屋六玉	杵屋六梅代	杵屋六竜	芳村伊四邦	杵屋喜代美	吉住小唐喜	吉住小扇	吉住小多恵	吉住小紋	杵屋栄和香	杵屋竹孝
杵屋佐規巳	杵屋佐枝	杵屋佐登代	杵屋佐美奈	今藤文子	杵屋吉勝	杵屋栄禧	杵屋恵津子	杵屋たね	杵屋栄香	岡安南	芳村伊四静
望月太八恵	望月太初悦	望月太左喜栄	望月太初子	望月太初福	望月越初子	望月太初子	望月太初子	望月太初子	望月太初子	望月太初子	望月太初子

二、常磐津恨葛露濡衣

——道行より久八意見——

浄瑠璃 常磐津 文字太夫	三味線 常磐津 菊三郎
同 常磐津 須磨太夫	同 常磐津 菊寿郎
同 常磐津 小文太夫	上調子 常磐津 菊雄

三、三曲西行桜

箏 米川文子	三絃 太田里子	同 富山清琴	同 宮城喜代子	尺八 川瀬順輔
--------	---------	--------	---------	---------

四、一中節石

橋

淨瑠璃	都	一つや	三味線	都	一中
同	都	一千恵	同	都	一よし
同	都	一いき	上調子	都	一のぶ
同	都	一まつ			

五、清元隅

田川

淨瑠璃	清元	志寿太夫	三味線	清元	勝寿部
同	清元	初栄太夫	同	清元	秀二郎
同	清元	志佐太夫	上調子	清元	美治郎
同	清元	清美太夫			

六、三曲八千代獅子

箏替手

宮城 数江
小橋 幹子
英 恵美子

塚越 清子
菊地 悌子
久保 茂

三絃本手

阿部 桂子
野坂 操寿
米川 敏子
井上 道子
米川 親利
福田 種彦
若松 記久子
小林 玉枝

箏本手

中島雅楽之都
唯是 震一
中島 靖子
田中 雅楽代
石井 雅楽盈
平田 雅豊世

米川 文勝之
米川 文志津
大貫 文加寿
竹下 文登志

三絃替手

尺八(五十音順)

関 文晴
江川 文志真
笠原 古都
野坂 恵子
富崎 富美代
楯久 雪子
藤本 安子
佐藤 親貴
富中 富美和
石田 清邦
吉沢 甫童
米川 文勝之
若松 記久子
小林 玉枝
南光坊 圭美
青木 静夫
磯野 茶山
田中 如童

第二部番組（五時半開演）

一、三曲都

の

春

唄

高橋栄清

箏

中能島欣一

福田富貴代

三絃

吉田純三

鳥居名美野

尺八

山口五郎

高橋正子

箏

吾孫子松鳳

藤井千代賀

三絃

高田松照

須藤井薫

尺八

高尾松蓉

杉本喜久井

箏

伊藤松超

小島染井

尺八

青木道夫

山勢司都子

三絃

伊藤清壽

萩岡松韻

尺八

川瀬勘輔

山木千賀

尺八

伊藤松博

二、河東節 助六所縁江戸櫻（助六）

浄瑠璃

山彦節子

三味線

山彦河良

同 山彦綾子

同

山彦光子

同 山彦ひな子

同

山彦莊子

同 山彦祐子

同

山彦基子

同 山彦昌子

上調子

山彦貞子

同 山彦科子

三、清元色

彩

間

蒨

豆

（かきね）

浄瑠璃

清元梅寿太夫

三味線

清元梅吉

同

清元登志寿太夫

同

清元邦寿

同

清元政栄太夫

上調子

清元松之助

同

清元成美太夫

四、三曲乱

輪

舌

箏本手 上原真佐喜
替手 中能島慶子
尺八 納富寿童

五、常磐津 乗合船 恵方万歳 (乗合船)

浄瑠璃 常磐津 千東勢太夫 三味線 常磐津 文字兵衛
同 常磐津 宮尾太夫 同 常磐津 文字蔵
同 常磐津 千勢太夫 上調子 岸沢己佐吉
同 常磐津 初勢太夫

六、長唄勸

進

帳

唄 杵屋六左衛門 三味線 杵屋六一郎
同 杵屋喜三郎 同 杵屋勘五郎
同 杵屋六美朗 同 杵屋六治二
同 杵屋六昶 上調子 杵屋六郎助

笛 望月長吉郎
小鼓 田中佐十次郎
同 田中佐喜二郎
同 田中和夫
同 田中伝次
大鼓 田中佐太次

曲目解説(演奏順)

第一部

一、長唄 京鹿子娘道成寺

歌舞伎舞踊の中に「道成寺もの」という系統のものがありますが、その中でもっとも有名で、しかも名曲として知られているのがこの曲です。宝暦三年三月、江戸中村座で「男達初買曾我」の第三番目に出したもので、初代中村富十郎が江戸下りの初お目見得狂言として出した所作事です。

作曲者は、当時作曲の名手といわれた杵屋弥三郎と伝えられています。が、「芝居囃子日記」によると、まり唄と山づくしは、杵屋作十郎が西国兵五郎の座敷狂言「山伏問答」を模して補作したと伝えられており、当時のやり唄を集めて一曲にまとめたもので、全体に統一のないことが、かえってこの曲や踊りの特色となっているようです。

二、常磐津 恨 葛 露 濡 衣

道行より久八意見

文久二年八月、江戸守田座で「勧善懲悪悪視機関」という芝居が上演された。作者は河竹黙阿弥で、またの名題を「村井長庵巧破傘」といい、村井長庵の悪逆を主筋とし、千太郎小夜衣のエピソードをちりばめた八幕十一場の世話物だった。

全体に寂しい作品だったが、作にも力がかもり、長庵と久八の二役をつとめた小団次の熱演で大成功をおさめた。作品としても、黙阿弥自身会心の作と考えていたという。

この曲は、そのうちの七幕目の道行浄瑠璃として上演されたもので、作曲は六代目岸沢式佐。

伊勢屋の息子千太郎は、丁字屋の小夜衣と深い仲になったが、長庵の奸計のために添うことができなくなり、二人は心中を決意して日本堤まで来たが、追手がかかり、小夜衣は判人の早乗三次に連れもどされ、千太郎は氣を失なってしまう。

一方、手代の久八は、千太郎の罪を着て主家の暇をとりに、千太郎の行方をたづねていたが、闇の中で倒れていた千太郎とめぐり合う。そして

五、清元 隅 田 川 (すみだがわ)

清元の曲が、遊里や下町を背景とするものが多いので、下品だとして非難された時代があった。

この曲は、そうした風潮にこたえた一種の試みの作品で、能楽の「隅田川」を改作している。糸野探菊作詞、二世清元梅吉作曲で、明治四十一年三月、第五回美音会で五世清元延寿太夫らが演奏した。

非常に地味で上品な曲で、いわゆる「隅田川もの」の中では、もっとも能楽に近いというの、右のような理由によります。

梅若丸を人買にさらわれた母班女の前が、物狂いしてわが子の行方をたづねさまよひ、隅田川まで来たが、渡し守から末期のさまを聞いて、空しく念仏を手向けるといふ筋。能楽のように梅若丸は登場せず、子をつねる母親の心境に重点が置かれているので、内面的な洪さがねらいとなっている。

なお、末段の船唄は、初演のときに延寿太夫が加えたといわれている。

六、三曲 八千代 獅子

この曲は、今でこそ箏曲ですが、そのもとは「ひとよ切尺八」で吹いた曲です。それを胡弓に移し、さらに三味線に、今日では箏でも弾くようになりました。

曲としてはずっと古い曲で、胡弓にうつした政島松枝が今の歌を作りましたが、三味線で弾き出した藤永松枝の名が、作曲者のようになっておられます。それは、そのときに「八千代獅子」と名づけたからでしょう。曲の構成は、前唄―手事―後唄、の三段形式で、手事三段は同じような手のくり返して、平凡といいますが、これは手事物の初期時代には、そういう単調のくり返しの形式があったもので、古典のおもかけを十分に残しているわけです。

歌詞の「いつまでも」は、八千代を祝う意味で、その獅子舞の曲と解されます。賑やかに奏され、合い口もいいため、「六段」と並んで一般になじまれています。箏も三味線も、本手と替手の合奏で、それ八尺八を入れた大合奏形式で舞台を飾ります。(藤田俊一)

自害しようとしていた千太郎にしみじみと意見をする。しかし持っていた刃物をとりあげようと争うはずみに、あやまって主人の千太郎を殺してしまうという筋で、上下二段になっている。

三、三曲 西 行 桜

これは、京都の菊崎松枝作曲の京風三味線の古曲で、難曲として有名な手事曲です。

構成は、前唄―手事―後唄、の三段形式ですが、中唄をはさんで前の手事が二上りで、後の手事が三下り、という変わった組立てです。

歌詞は謡曲の「西行桜」から、終りの方のクセの一節をそのまま持ってきて来ますが、内容は、京都の桜の名所を並べて、華やかに仕立ててあります。

元来「西行桜」は、西行法師が京の西山に住んでいた頃の物語りで、老木の桜の精と、法師の詠歌と問答したという筋で、それを京の名所と桜に寄せて謡う曲ですから、陽気のただよう様に、手も歌も、華麗にできておられます。こうして、筋は派手ですが、性来音律をわが命とする桜校たちの個性は、技巧の妙をつくして、皮肉もあれば難手もありで、妙手百出の凝ったものになります。

さらに、箏三絃合奏の合い口に効果がねらわれ、それに尺八がからんで、一層模範的のものとなります。(藤田俊一)

四、一 中 節 石 橋

一 中 節 というのは、今からおおよそ三百年以前に、京都で生れた浄瑠璃です。豊後系浄瑠璃の祖であり、近世邦楽の基礎的な音楽といわれています。はじめ芝居に出ていましたが、やがて舞台をはなれ、音楽として楽しまれ、今日に伝わっています。今では、古曲といわれ、河東節、宮園節、萩江節とともに、古曲会という団体を作っています。

この曲は、能楽の石橋から題材を得た作品で、明治二十六年、初代都一広が作曲、発表したものです。

一 中 節 の技法を十分に生かしながら、いかにも明治時代に作られたという感じのする曲で、この世と浄土との間にかかる石橋の説明から、牡丹にたわむれる獅子のありさままで、変化に富んでおり、唄も三味線も十分に發揮できるように作られています。

第二部

一、三曲 都 の 春

山田流は江戸時代の箏曲として発達したもので、それが歌を中心として後世に伝わったのですが、開祖山田松枝の直門三家の一人、山勢三代目松韻が、東京音楽学校教授時代に、学校の奏楽堂(現在の芸大奏楽堂)が竣工した際、明治二十三年のその開場式に、この新作を「都の春」と銘打って発表した曲です。

山田物としては珍らしい手事物で、華やかな曲として流行をつづけておられます。作者は先代鍋島家のお姫様(山勢出稽古先)です。

「都の春」といっても、東京ではなく、旧都京都の春げしき、それに大阪の春をたたえて、御国の繁栄を謡った賑やかな曲です。

曲の構成は、初めに長い前奏があり、独吟から前唄、そこに手事があって、それまで本調子で通してきたのを、終唄が二上りで納まる賑やかな曲で、山田流でも台広駒を使うという、変わった曲です。大家揃いの三床で演出されました。(藤田俊一)

二、河東節 助六所縁江戸桜

河東節というのは、純粹の江戸系浄瑠璃で、俗に江戸節ともいわれる。他の近世邦楽は、ほとんど上方系であるのに、江戸で生れて育ったところに特色がある。唄い方、三味線の弾き方に、いわゆる江戸ツ子の気分を感じとることができる。

はじめは一 中 節 と同じく芝居にも多く出たが、やがて舞台をはなれ、この「助六」以外は、音楽として楽しまれ、今日に伝わった。今では一 中 節 と同様、古曲の一員となっている。

この曲は、河東節の代表曲で、歌舞伎十八番の「助六」の出端に使われる浄瑠璃です。宝暦十一年三月、江戸市村座の「江戸紫根元曾我」の第二番目に用いられてから、それ以前の多くの助六浄瑠璃にかわって、代表曲となった。詞章は、前の諸作品をまとめて整理したもので、作者は金井三笑・桜田治助。

三、清元 色彩 間 苺 豆

文政六年六月、江戸森田座の「法懸松成田利劍」の二番目序幕、木下

川堤かさね殺しの場に出した浄瑠璃。四世鶴屋南北が腕をふるった怪談劇で、複雑な筋の一部分。ただし、この浄瑠璃は、松井幸三が書いた。

結城の家中久保田金五郎は、同家中の絹川甚三郎と口論して主家を追われ浪人中、下総羽生の百姓の助の女房菊と蜜通、助を片輪にしてかけおちする。しかし間もなく菊は死に、金五郎が死骸を石和川のほとりに埋めて通夜をしているところに、二人を追ってきた助が、赤子を抱いて通りかかり、立廻りの末、赤子は川に落ちて流れ去り、助は鎌で金五郎に殺されてしまう。

それから十数年後、川に落ちた赤子は助が助かかってかさねとなり、絹川家の養女となって奥女中勤めをしていたが、今は与右衛門と改名した金五郎と深い仲になり、心中しようとして木下川堤へ来る。ここがこの浄瑠璃となっているわけだ。

この川堤に、鎌がさびついて刺さったままの助の髑髏が流れてきます。与右衛門がその鎌を抜くと、助の怨念がかさねに乗り移って、かさねの面相が変わり、びつことなります。しかも、このかさねが助の夷の娘とわかるので、土橋の上で与右衛門がかさねを殺すというのが大体の筋です。怪奇味のある清元ですが、それだけによくできており、名曲としてよく演奏されます。

四、三曲 乱 輪 舌

この曲は、純粹の器樂で、歌はありません。俗に「みだれ」といって、「六段」「八段」「乱」を、段物としてあります。これを、序破急、または天地人にたとえてありますが、いづれも約三百年以前の作品で、俗等の開祖八橋檢校の作曲です。

組曲は等の本曲として型にはめてあり、歌曲は一歌六十四拍子、それの六歌組合わせですが、段物は一段五十二拍子、そういう形式を乱してこの「乱輪舌」だけは拍子数や段を乱して、純器樂としての自由があります。

実は、「乱」も「りんぜつ」も昔からあった名称で、輪舌陰陽合奏が廻り廻って輪還的の音楽だとか、乱も古くから伝わった曲名です。

この「乱輪舌」の特長は、カキ手が多いことで、あらゆる等の爪の技が絃上を走るが、締めくくりは、宮徴の音律で立派にしています。演奏は、等の本手と替手がより合わされるのを、尺八の連続音で縫っていく、そこに旋律の妙があり、合奏のより上りがあるのです。

(藤田俊一)

五、常磐津 乗合船 恵方万歳

現在は「乗合船」の略称で通っており、常磐津でも指折りの名曲となっているが、天保十四年正月、江戸市村座で初演されたときには「魁香樹いせ物語」という題名で、常磐津、富本、竹本、長唄の四流掛合の大切浄瑠璃所作事であった。のち、常磐津のみの所作事として独立し、題名も乗合船と改められた。

明治二十九年正月、東京春木座の市川猿之助・中村勘五郎らによる復活上演以来、にわかに舞踊曲としても大流行するようになった。

初春の隅田川辺の渡し場におちあつた市井の諸人物の芸尽しといった趣向で、曲としてもすぐれ、眼目の万歳と才造のくだりは注目しつゝといわれる。すべて初春の洒脱風雅な気分がよく出ており、はなやかな前弾きから、万歳・才造の出、白酒屋のシヌキ、大工の道具尽しのクドキ、万歳・才造の柱立など、風俗描写を展開する。

原作者の着想は、初春に因んで七福神と宝船をきかせたのだが、最近では登場人物を色々な職業の人たちに変え、数もふやして場面を賑やかにすることが行われている。

六、長唄 勧 進 帳

この曲は「越後獅子」などと共に、長唄の代表曲としてよく知られております。元来が舞踊劇の地として作られたものですから、歌詞だけを見ていたのでは意味が通じないところがあります。それにもかかわらず広くてはやされているのは、劇としての勧進帳が、名優九代目團十郎の妙技によつて価値づけられ名高くなつたのと、今一つ、節付がサラサラとしていて、演奏しやすいことに原因していると思われまふ。いざれにしても、長唄の美点を集大成したといつてもよいほどの名曲とされ、音楽として広く知られています。

作者は三世並木五瓶、作曲は四世杵屋六三郎（のちの六翁）が、一世一代としてその技倆を振つたもので、作曲に三ヶ月を費したと伝えられています。それも、はじめは全曲二上り調の説教節じみた節付だったので、のちに改作して、現今の本調子となつたと伝えられています。

なお初演のときの「勧進帳」は、いわゆる松羽目物の先駆作品であり、また、演奏にあたっては立分れの形式をはじめたことも、特色として知られています。